

解説

柳谷 あゆみ



ザカリーヤ・ターミル（一九三一年）はシリアの短編小説家、児童文学者、編集者である。彼はダマスカスに生まれ、十三歳

から製鉄工として働いた。二〇一五年刊行の英国の現代アラブ文学誌『バニバル』（Banipal）誌第53号掲載のインタビューで彼は自身の青年時代や執筆について語っており、図書館で本と出会い、濫読経験を通して教養を積んだと述べている。一九五〇年代後半から彼は執筆活動を開始し一九六〇年に処女短編集『白馬のいななき』（Sahī al-Jawād al-'abyad）を刊行した。以降、順調に筆を進め、一九七八年には代表作の一つ『十日目の虎たち』（Al-Nunūr h al-yawm al-ashīn）を刊行した。表題作は、虎の調教の話を通して、個の尊厳がいかに貶められ、奪われていくかを表したもので、結末は痛烈な社会批判となっている。

ターミルの作品は正則アラビア語で書かれて

おり、平易で簡潔な文章を特徴とする。だが、読解してみるとかなり読み度があり、深く入り込んで考えないと十分な理解が得られないことさえある。

現代シリアの表現全般の傾向として、メタファーの多用と、具体的な事物の描写を避けることが挙げられる。検閲によって言論と表現の自由が制限が課せられている状況で、現実を負の側面も含めて提示するため、このような表現技法はよく用いられてきた。

ターミルの文学も例外ではないが、加えて彼自身の（奇想も含めた）発想の豊かさが、読者の心に絶えず小さな混乱をしかけ、抵抗を生みだしている。また「十日目の虎たち」もそうであるように作品の底に現実の悲慘や絶望があり、奇妙な景色の陰に冷やかな事実が「現実」に存在することを読者は実感することになる。

ターミル自身も表現・言論活動に対する抑圧とは無縁ではない。彼は一九八一年にシリアを出国し、英国オックスフォードに拠点を移した（この転居は、彼が編集する文化雑誌『マリファ』（Al-Marīfa）に規制への批判を含む論文を掲載したため、さまざまな抑圧を受けるようになったことが主因とされているが、本人は二〇一二年のインタビューでそれは表面的な理由に過ぎないと述べている⁽⁶⁾）。

転居後も彼はアラビア語で執筆しており、作

品の内容・表現ともに、シリア（を含むアラブ諸国）で本が販売され、読まれることを意識して書かれたものであるとわかる。その意味で彼の小説は現代シリア文学であり、（シリアにおける、表現・出版そのものに対する抑圧を想定しない）在外作家の作品とは区別してとらえるべきであろう。社会への問題提起も含めて彼の活動や文学に地域性は強く感じられるが、同時に彼は現実の悲劇や絶望を、人間そのものの弱さに起因する強欲や利己主義、無関心から生み出されたものとして捉えており、そこには地域を超えた普遍性を見出すことができる。

二〇一二年からターミルはFacebookにMihāz（拍車）というページを開設し、所感や作品の掲載を続けている。最近の作品もこのページから読むことが出来る。また紙媒体では、二〇一五年に短文集『悲嘆の国』（Al-Bay'at）を刊行した。

『はりねずみ』（Al-Qunūdh）はターミルの小説では十一冊目の単行本で、二〇〇五年に刊行された。二〇一七年現在、短編小説集としては彼の最新刊にあたる（彼は現在も新聞などのメディアで短編の発表を続けているが、まだ一冊にまとめていない）。本作は英訳も刊行されているが、残念ながら訳者は未見である。

本作は二十二の掌編（本書にはうち六編を収

めたが一つの物語を構成する一人称の小説で、主人公の「僕」は、両親と少し年の離れた兄と暮らす六歳の子どものである。「僕」は家の妖精や樹、壁、猫たちと語り、日常の不思議に驚きながら生活している。ターミルの小説において、子どもは常に無邪気な存在であったが、子どもを主人公とした本作は、これまでの彼の短編集とは異なり、絶望や悲嘆は鳴りを潜めている。現実の残酷な側面は幼い「僕」の視界にもときどき現れるものの「僕」は両目を瞑り、それらをやりすげす。子どもである「僕」はまだそれらとはほとんど関わっていない。彼の世界は街区の中、家の周りのごく小さな一角に限られており、限られているからこそ、その中の一つ一つと親密な関係を築くのである。

あくまで訳者の解釈であるが、標題の「はりねずみ（ヤマアラシともいう）」は、互いに寄り添おうとしても近づくことが出来ない「はりねずみのジレンマ」の象を含んだものと取った。この世にある美しくやさしい、善なるものたち。子どもである「僕」には、まだ関われない部分が多く、世界の全容、深遠に触れることができない。しかし大人になれば、子どもだった自分が見ないで済ませてきた現実の悲惨や困難に直面し、当事者にならなければならない。愛すべきものに究極的には近づけない、「僕」のかすかな淋しさを描いている。本作が単なる郷

愁に終わらないのは「やりすげす」子どもの「僕」を通して、酷な現実が誰にも内在することを明確に示しているためである。「ガゼル食いたち」は最も象徴的な作品であるが、優雅で美しく、誰も傷つけない動物、ガゼルに強烈に惹かれる「僕」が、自分がガゼルにとつてどのような存在であるかを経験から実感していく。そしてその事実をやはり「やりすげす」のである。

物語の最後には、三十代になった「僕」が現れる。かつて大人にならないと言った「僕」も大人になり、いくつかの妥協を経て生活しているが、「僕」には六歳だった「僕」が色濃く残っており、無邪気さは失われていない。子どもには得られないもの、大人になって失ったもの、それぞれを「僕」は知るのである。

本作は従来の彼の作品とは異なり、理解に至るまでの抵抗は大きくない。素直な物語である。これもまた主人公が子どもであることが大きい。現実の不具合や制限を自覚しない子どもと世界として、彼の奇想は消化され、懐かしい空想の産物として読者の前に現れる。時代や場所が明示されていないが、かつてシリアで過ごした者であれば、この作品の描写にタマスカスの旧市街の街区や住居を想像できるだろう。

邦訳にあたって、作品の選択と翻訳を許してください。タカリーヤ・ターミル氏に心から

感謝する。

自分にとっては『酸っぱいブドウ』（上智大学アジア文化研究所 Occasional Papers として二〇一五年に刊行。なお、一話のみだが、前出「十日目の虎たち」も拙訳が日本マダグレブ文化研究会 ニュースレター『ワークワーク通信』Vol. 1（二〇一五年）に掲載されている）に続く二冊目の翻訳である。ターミルの作品を読み解くことは、自分には過去を思い出すことであり、かつてと異なる現在を味わうことでもある。ターミルは今なお健在で、これからさらに新しい世界を開いていくこと、そのあらゆる時間が自分には幸いである。

※本邦訳は科学研究費助成事業（基盤研究B）「アフリカ・ベル文学の比較地域文化的研究体制の構築」（課題番号・26300021）研究代表者・鶴戸聡の成果の一部である。